

〔研究ノート〕

原羊遊斎の下絵集に載る酒井抱一の 落款・下絵・指示書について

原羊遊斎(1769～1845)は江戸時代後期の蒔絵師であり、著名な絵師の図案や古典作品を基にした蒔絵作品で人気を博した。羊遊斎と特に関係の深かった絵師が酒井抱一(1761～1828)だ。宗達や光琳など琳派の絵師たちは工芸のデザインにも積極的に携わっていた。光琳に私淑した抱一もその伝統を意識しており、羊遊斎と組んで蒔絵作品の下絵を多く残しています。抱一下絵・羊遊斎作の蒔絵作品には、「抱一筆」という銘が明瞭に入れられており、人気絵師であり江戸の粹人としても知られた抱一の名がブランド化していたことが窺えます。

大和文華館蔵の「図案集」は羊遊齋の下絵集です。大和文華館本一冊の他に、出光美術館に五冊、ボストン美術館に一冊が伝わっています。大和文華館本の奥書には七冊の中で最も早い享和元年(1801)の年紀があります。文政元年(1818)に没した松平不昧の戒名などが記された貼紙もあることから、享和元年以後に付け加えられたものもあることが分かりますが、早い頃より蓄えられてきた羊遊齋の下絵集として貴重な存在です。

大和文華館本には、名物裂の模様、大名家所蔵の蒔絵の名品の技法、光琳作品に由来する模様などを控えた頁などがあり、羊遊斎の幅広い学習が窺えます。その中で最も多く登場する絵師

の名は、やはり抱一です。本稿では大和文華館本に載る抱一落款の貼紙、抱一の下絵、指示書に注目したいと思います。

まず抱一落款の貼紙について。大和文書館本の11丁裏には、抱一の用いた落款(署名、印章)花押などが写された小紙が何枚も貼られており、羊遊斎蒔絵に施される抱一銘として参考に寛政9年(1797)の出家直後頃に抱一が用いたと考えられる「関西蜚翫人」という珍しい号の印章なども含まれています。また、11丁裏の左上に貼られる小紙(署名)に記された「抱一筆」という署名の書体は、「抱」の字の二画目が外側にカーブしながらゆったりと長く伸び、クニヤリと曲がって三画目に繋がるタイプのものでも、文化年間(1804~18)初期頃の抱一の書体の特色が顕著です。絵画では、文化4年(1807)の年紀のある「柿本麿図」の署名(図2)など、このタイプの書体が見られます。なお文化年間末になると、「抱」の二画目のカーブが引き締まり、三画目に繋がらないタイプのものへと変化します。抱一下絵・羊遊斎作の蒔絵に見られる抱一銘の多くは後者のタイプで記されていますが、「四季草花蒔絵旅草笛」のように、前者のタイプの抱一銘も数は少ないながらも残っています。奥書の年紀だけでなく、こうした抱一の画業

の前期に用いられた印章や署名を写した貼紙も、抱一と羊遊斎の関係が、抱一が光琳風の絵画を描き始めた比較的早い頃から始まっていたことを示唆します。

続いて抱一下絵について。大和文華館には、植物の曲線美や余白を活かした抱一下の下絵が十数点ほど収められていますが、その下絵を基に製作された蒔絵作品も残されています。二つのさざげの実(鞘)をクロスアップして大小の葉とともに美しく配した下絵(図3)を基にして作られたと考えられるのが、「さざげ蒔絵茶笥筒」(図4)です。図様は共通していますが、下絵を枠線通りに切り取り円筒形にすると、茶笥筒よりもう少し細長い形状となっています。下絵は箱の蓋面などのデザインとして考えられたもので、それをやや横長に改めて茶笥筒のデザインに援用したのではないかと考えられます。抱一下絵の蒔絵が人気で、それを基に商品のバリエーションを広げる工夫がなされていたことが窺えます。

最後に抱一の指示書について。大和文華館本には蒔絵の素材を指示した抱一の指示書(図5)が一枚貼られています。抱一の署名はありませんが、羊遊翁のものと考えられる濃墨でボンボンのと記される他紙の書体とは異なり、抱一独特の細く流麗な書体で表されており、抱一筆と考えられます。そこには、「木地の処を赤かねふん、ぞうけのころを銀、桜花を金にてねかひ上候」と記されています。「赤かねふん」とは「銅粉」を指すのでしょう。木地や象牙など、背景の素材の色味も考慮しつつ、金銀だけでなく珍しい銅粉なども使用

するように指示しています。この指示書には下絵が付属していないため、その効果が分かりにくいですが、出光美術館蔵の下絵集に載る「春來窓」字の箱は、下絵と指示書が共にあり(図6)、抱一の意図を窺うことができます。下絵には、蓋表に「春來窓」という文字を、箱の内側に雪の模様を施すことが表されており、抱一の書による指示で、蓋表は木地にして金の高蒔絵で文字を、内側は黒漆を一面に施し銀蒔絵で降る雪の模様を表すように伝えられています。抱一は蓋表を木地にすることに拘っており、そうすることで、蓋を開けた際に箱内の漆黒色が際立ち、更に黒漆地に浮かぶ銀蒔絵の雪もより美しく映えるという視角効果を狙ったと考えられます。春來窓とは、抱一から甥の酒井忠実(1814年に姫路藩主となる)に譲られた号であり、忠実のために製作された特別な作品であった可能性もあります。抱一下絵の蒔絵作品は人気であったために、弟子の下絵による作品も抱一銘としたり、抱一風のデザインを適当にあしらうこともあったことが明らかにされていますが、時には量産品もこなしつつ、特別な注文品や高級商品については、抱一は下絵を提供するだけでなく、用いる素材まで拘わり、彩色の効果などに工夫を凝らしていたことが分かります。(宮崎もも)

※図2は『酒井抱一 江戸情緒の精華』（大和文華館、2014年）、図4は『羊遊斎 江戸琳派の蒔絵師』（五島美術館、1990年）、図6は『ミュージアム』557号（東京国立博物館、1998年）より複写いたしました。

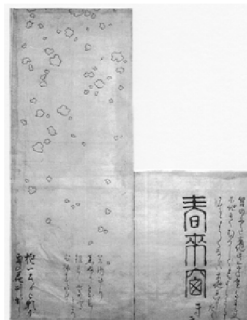
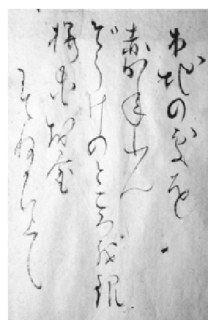
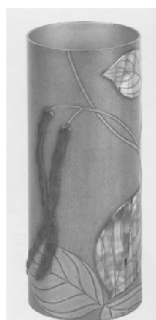
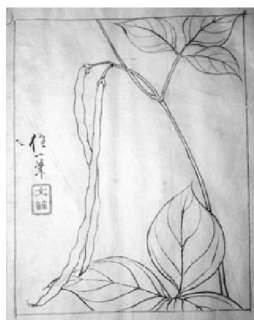
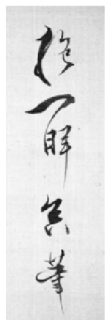


图 1

图 2

图 3

图 4

图 5

☒ 6

季刊 美のたより No.190

平成27年 4月3日

発行 大和文華館